

## COSMETIC FOR OIL PACK AGENT AND MAKEUP OILS

特許公報番号 JP2001233756 (A)

公報発行日 2001-08-28

発明者 SETA KOICHI

出版人 WAMILLES COSMETICS KK

分類:

一括記: A61KB/00; A61KB/02; A61KB/96; A61KB/97; A61Q19/00; A61KB/05;  
A61KB/02; A61KB/95; A61Q19/00; (FC1-7); A61K7/48; A61KB/00

一欧洲:

出願番号 JP20000050268 20000225

優先権主権番号: JP20000050268 20000225

他の公報

JP3544505 (B2)

要約 JP 2001233766 (A)

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a cosmetic for makeup oils and oil pack agents which give excellent activating effects and the like to skins. SOLUTION: This cosmetic used for oil pack agents and makeup oils contains a Ligustrum acutifolium extract or the mixture of this extract and an extract of oil soluble plant other than the former extracted with an oily solvent comprising one or more of a hydrocarbon, a fatty oil, a fat acid, in a high temperature range of 80°-90 deg. C or in a temperature range including the high temperature range of 80°-90 deg. C. The employment of the cosmetic enables the improvement in the tension and dryness of skins, the reduction in the wrinkles of the skins, and the reduction in the freckles and pimples of the skins.

esp@cenet データベースから供給されたデータ — Worldwide

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2001-233756

(P2001-233756A)

(43)公開日 平成13年8月28日 (2001.8.28)

(51)Int.CL<sup>7</sup>  
A 6 1 K 7/48  
7/00

識別記号

F I  
A 6 1 K 7/48  
7/00

データコード<sup>7</sup> (参考)  
4 C 0 8 3  
K  
U

審査請求 未請求 請求項の数 5 O.L. (全 9 頁)

(21)出願番号	特願2000-50268(P2000-50268)	(71)出願人 593196843 ワミレスコスマティックス株式会社 神奈川県横浜市港南区港南中央通7-16
(22)出願日	平成12年2月25日 (2000.2.25)	(72)発明者 濑田浩一 神奈川県横浜市港南区港南中央通7-16 ワミレスコスマティックス株式会社内
		(74)代理人 100097010 弁理士 水野豊広
		Fターム(参考) 4C083 AA111 AA112 AA122 CC006 CC07 DD30 EE13 EE14 FF01

(54)【発明の名称】 オイルパック剤及び化粧用油類のための化粧料

(57)【要約】

【課題】 優れた皮膚賦活効果等を皮膚に与えるオイルパック剤及び化粧用油類のための化粧料を提供すること、を目的とする。

【解決手段】 化粧料は、炭化水素、油脂及びロウ類の一種若しくは二種以上からなる油性溶媒を用いて90℃以上の高温領域若しくは90℃以上の高温領域を含む温度領域で抽出されるトウキ抽出物若しくはトウキ抽出物とトウキ以外の油溶性植物の抽出物とが、含まれていることを特徴とする。

【効果】 化粧料に使用によって、皮膚のハリ及びカサツキが改善されて、皮膚のシワが減少して、皮膚のシミ及びニキビも減少する。

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】炭化水素、油脂及びロウ類の一種若しくは二種以上からなる油性溶媒を用いて90℃以上の高温領域若しくは90℃以上の高温領域を含む温度領域で抽出されるトウキ抽出物が含まれていることを特徴とするオイルパック剤及び化粧用油類のための化粧料。

【請求項2】炭化水素、油脂及びロウ類の一種若しくは二種以上からなる油性溶媒を用いて90℃以上の高温領域若しくは90℃以上の高温領域を含む温度領域で抽出されるトウキ抽出物とトウキ以外の油溶性植物の抽出物とが、含まれていることを特徴とするオイルパック剤及び化粧用油類のための化粧料。

【請求項3】炭化水素、油脂及びロウ類の一種若しくは二種以上からなる油性溶媒を用いて90℃以上の高温領域若しくは90℃以上の高温領域を含む温度領域で行われる抽出が、同一の油性溶媒を用いてトウキ及びトウキ以外の油溶性植物とが順次若しくは同時に行われてて、トウキ抽出物及びトウキ以外の油溶性植物の抽出物が含まれる油性溶媒が、配合されていることを特徴とするオイルパック剤及び化粧用油類のための化粧料。

【請求項4】前記油性溶媒が、スクワラン、スクワラン含有植物油及びスクワラン含有動物油の一種若しくは二種以上からなること、を特徴とする請求項1～3のいずれかに記載の化粧料。

【請求項5】前記トウキ以外の油溶性植物が、シコンであること、を特徴とする請求項2～4のいずれかに記載の化粧料。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、高温油性溶媒への溶解成分を主体とするトウキ抽出物の含有によってオイルパックに際して皮膚賦活効果等を発現するオイルパック剤及び化粧用油類のための化粧料に関する。さらに、別の本発明は、トウキ以外の油溶性植物の高温溶解成分由来の効果をトウキ抽出物由来の皮膚賦活効果をトウキ以外の油溶性植物の高温溶解成分の効果によって補完するオイルパック剤及び化粧用油類のための化粧料に関する。

## 【0002】

【従来の技術】化粧料はその使用目的に応じて原材料を配合した組成物で、化粧料についての免疫学的及び皮膚科学的な研究によって皮膚老化防止剤が化粧料に配合される傾向にある。ただし、皮膚老化防止剤は、老化現象の遅延に何らかの効果を有するとされる材料が、経験的及び実験的に皮膚老化防止剤として選択されて用いられている。

【0003】皮膚老化現象は、次の(イ)～(ヘ)等が加齢に基づく現象として挙げられている(小沢明他:香粧会誌、18(1) 14(1994)等を参照)。

(イ)細胞大きさの不規則化、細胞分化の異常発生増

加、ランゲルハンス細胞及びメラノサイトの減少等で示される表皮変化、(ロ)細胞成分及び血管成分の減少等で示される真皮変化、(ハ)毛母メラノサイト消失、毛包数減少、皮脂線機能減少及びエクリン減少等に表れる皮膚付属器の変化、(ニ)表皮の分裂機能低下及び皮膚損傷の修復遅延等で示される表皮の修復能低下、(ホ)発汗の減少及び水分保持機能低下等で示される皮膚の防衛及び水分保持のための機能低下、(ヘ)免疫担当細胞の減少等で示される免疫機能低下である。

【0004】皮膚老化防止剤としては、紫外線防止剤、酸化防止剤、保湿剤、網型賦活剤、血流促進剤、コラーゲン生成促進剤及び細胞間脂質等が一般的に使用される。紫外線防止剤は、皮膚に当る紫外線を吸收若しくは散乱させて、紫外線が体内に活性酸素を生成させるのを防止するものである。紫外線防止剤は、有機系及び無機系のものがあるが、安全性の点から、無機系紫外線防止剤が一般的に使用されている。

【0005】酸化防止剤は、身体内の活性酸素及び過酸化脂質の生成を抑制及び遅延させて、ビタミン、カロチノイド、フラボノイド、タンニン、カフェー酸誘導体、リグナン、サボニン、植酸素及びラクトフェリン等を含む多くの天然系酸化防止剤及び合成系酸化防止剤の化粧料への使用が示唆されている。ビタミンは、B<sub>1</sub>、C及びEが有効であるとされていて、カロチノイドは、 $\alpha$ -カロチン、 $\beta$ -カロチン及びリコピン等が有効であるとされている。

【0006】保湿剤は、角質層の保湿機能を正常化させて小じわを減少させるもので、化粧料については、多価アルコール、ムコ多糖類、アミノ酸及び糖等の使用が示唆されている。細胞賦活剤は、皮膚のターンオーバーの改善、細胞外マトリックスの代謝上昇及びその他の理由によって、皮膚の状態及び機能の活性及び回復に何らかの効果があるもので、多種の材料が細胞賦活剤としての可能性が示唆されている。細胞賦活剤としては、(イ)ビタミンA、ビタミンE、コラーゲン、エラスチン及びアラントインの直接的作用物質、(イイ)プラセンタエキス、牛乳タンパク質分解物、牛脾臓抽出物、牛血液分解物、仔牛豚臓抽出物及び幼牛血液の透析物等の動物抽出分解物等、(イリ)酵母エキス、乳酸菌エキス、発酵乳抽出液等の有用微生物代謝物、(イロ)植物エキス等が化粧料への使用を示唆されている(福永巖他:「フレグランスジャーナル」、20(6), P41(1992)等を参照)。

【0007】また、代謝促進作用を有する植物が細胞賦活剤としての使用を示唆されていて、それには、アロエ、ナスタチウム、オドリコソウ、オウゴン、ニンジン、センブリ、スピナ、ニンニク、大豆、ゲンチアナ、ハマメリス、トウキ、ゴボウ根、ホップ、トウキンセンカ、シコン(ムラサキ科のムラサキの根)、ヨクイニン及びトマト等がある(福永巖他:「フレグランスジャーナル」、20(6), P41(1992)等を参照)。

【0008】また、代謝促進作用を有する植物が細胞賦活剤としての使用を示唆されていて、それには、アロエ、ナスタチウム、オドリコソウ、オウゴン、ニンジン、センブリ、スピナ、ニンニク、大豆、ゲンチアナ、ハマメリス、トウキ、ゴボウ根、ホップ、トウキンセンカ、シコン(ムラサキ科のムラサキの根)、ヨクイニン及びトマト等がある(福永巖他:「フレグランスジャーナル」、20(6), P41(1992)等を参照)。

50

ナル」、20(6), p 41(1992)等を参照)。【0008】なお、シコンの溶媒抽出物は、従来から細胞賦活剤になる植物として知られていたが(岡野由利他:「第31回SCCJ研究討論会講演旨集」、p 59、(1991)及びその他の参照)、エラスターの活性を抑えて皮膚のハリ及び弾力を回復できると提案されて、シコンの根から抽出溶媒と共に浸漬または加熱還流した後ろ過してから濃縮したものの使用が提案されている(特開平11-246338号公報を参照)。シコンの抽出溶媒は、メタノール、エタノール若しくは1、3-ブチレングリコール等のアルコール類、含水アルコール類、アセトン、酢酸エチルエチステル等を用いる場合に最良の効果が得られるとしている(特開平11-246338号公報の段落番号00005の記載を参照)。

【0009】さらに、創傷治癒促進作用を有する植物が、細胞賦活剤として化粧料への使用が示唆されていて、それには、アルニカ、ヘマズ、スイカズラ、オウバク、マツツリ、タチヤカウソウ、ニンジン、マンナンロウ、トウキンセンカ、サルビア、メリッサ、オトギリソウ、シモツケ、ローズマリー及びセヨウノコギリソウ等がある(福永巖他:「フレグランスジャーナル」、20(6), p 41(1992)等を参照)。

【0010】血流促進剤は、血流循環を改善して老廃物の排出を促進するもので、イチョウエキス、センブリエキス、テルミナリアエキス、マロニエエキス、ビタミンE、ビタミンE誘導体、y-オリザノール等が知られていて、化粧料に使用されるものもある。コラーゲン生成促進剤は、コラーゲンの生成促進に有効なもので、ビタミンC誘導体、牛乳精成分、牛乳抽出液、蜜蝋抽出物等が知られていて、化粧料に使用されるものもある。ビタミンA酸及びa-ヒドロキシ酸も、皮膚細胞賦活の目的で化粧料に配合されている。

【0011】一方、皮膚は、外部から物質等の侵入を阻止する生理的保護層を表面に備えていて化粧料成分を生きた表皮細胞、真皮組織及び皮下組織に浸透させるのに困難を伴うことがある。そのために、経皮吸収を促進させる化合物を化粧料に配合することがある。例えば、美白剤(アスコルビン酸、ジバルミチン酸、アスコルビン酸及びエキノノイタ抽出物等が挙げられている)は、アニオン性界面活性剤と、両性界面活性剤、非イオン性界面活性剤及びカチオン性界面活性剤との併用によってその美白効果が有効になるとの提案がある(特許番号第26020270号公報を参照)。

【0012】作用物質を皮膚表面層に運搬する作用物質と皮膚深部層に運搬する作用物質を含有させて作用物質を皮膚の皮膚の表面及び深部に作用させるようにした美容組成物等も提案されている(特許番号第2595478号公報を参照)。

【0013】

【発明が解決しようとする課題】植物抽出物(植物エキス)は、古くから生薬として実用に供されていること等との関係から多くの植物抽出物が化粧品原材料の許可基準に掲載されている。しかし、植物抽出物は、抽出溶媒及び抽出条件の相違によって抽出物の皮膚への効果が著しく相違する。

【0014】トウキ(当帰、和名・カラトウキ)抽出物(トウキエキス)についてみれば、水、エタノール、ブロビレングリコール、1, 3-ブチレングリコール若しくはそれらのノン溶媒により抽出したトウキ抽出物は、主成分として、ケマリン誘導体、アンジェル酸、アミノ酸及び多糖類を含有して、保湿、抗アビーネ性皮膚炎及び血流促進に有効であると示唆されている(「化粧品ハンドブック」日光ケミカルズ(株)ほか、平成8年発行、p 347、須貝哲郎ほか:「皮膚」36(6)、849(1995)、長谷川義典ほか:「皮膚科紀要」88(4)、379(1993)等を参照)。トウキからn-ヘキサン可溶部及びn-ブタノール可溶部を除いて、水、エタノール若しくはこれらの混合液により抽出したるトウキ抽出物も同様であると示唆されている。

【0015】一方、湯通したトウキからスクワランにより加温抽出したトウキ抽出物は、主成分として、n-ブチレングリタリド及びリグスチリドを含有して、血管拡張及び美白に有効であると示唆されている(「化粧品ハンドブック」日光ケミカルズ(株)ほか、平成8年発行、p 347等を参照)。なお、「加温抽出」の「加温」は、室温から50~60℃までの加熱を意味する慣用語ではあるが、約40~80℃までの範囲を示す語としても使用されている(「化学大事典」2、共立出版(株)等を参照)。

【0016】さらに、トウキの水抽出物を更に水蒸気蒸留したトウキ水についても、化粧品への使用が示唆されているが、具体的な作用及び効能は未知である(「化粧品ハンドブック」日光ケミカルズ(株)ほか、平成8年発行、p 347等を参照)。しかも、従来においては、トウキ抽出物の化粧料への具体的な利用及び検討されておらず、特殊な化粧料(例えば、パック剤、化粧用油類)に配合した場合の効果については未知であった。

【0017】そこで、トウキ抽出物の化粧料への具体的な利用が本発明者により詳細に実験的に検討されて、従来提案の抽出条件によるトウキ抽出物の配合によってはパック剤等では優れた効果を見いださないこと、及び特定の油性溶媒に高溫で溶解するトウキ成分(すなわち、トウキ抽出物)であれば、オイルパック剤への配合によって優れた皮膚賦活効果等の効果を発現することが見いだされた。

【0018】ここにおいて、第一の本発明は、トウキ抽出物の優れた皮膚賦活効果等がオイルパックに際して発現するオイルパック剤及び化粧用油類のための化粧料を提供すること、目的とする。

【0019】第二の本発明は、トウキ以外の油溶性植物の抽出物の効果によってトウキ抽出物の優れた皮膚賦活効果を補完するようにしたオイルパック剤及び化粧用油類のための化粧料を提供すること、を目的とする。

#### 【0020】

【課題を解決するための手段】第一の本発明(請求項1に記載の発明)による化粧料は、オイルパック剤若しくは化粧用油類として用いられるもので、炭化水素、油脂及びロウ類の一種若しくは二種以上からなる油性溶媒を用いて90℃以上の高温領域若しくは90℃以上の高温領域を含む温度領域で抽出されるトウキ抽出物が、含まれていることを特徴とする。

【0021】また、第二の本発明(請求項2に記載の発明)による化粧料は、オイルパック剤若しくは化粧用油類として用いられるもので、炭化水素、油脂及びロウ類の一種若しくは二種以上からなる油性溶媒を用いて90℃以上の高温領域若しくは90℃以上の高温領域を含む温度領域で抽出されるトウキ抽出物とトウキ以外の油溶性植物の抽出物とが、含まれていることを特徴とする。

#### 【0022】

【発明の具体的説明】【第一の本発明】第一の本発明による化粧料は、オイルパック剤若しくは化粧用油類として用いられるもので、トウキの高温油性溶媒への溶解成分等(すなわち、トウキ抽出物)が配合されることによって使用に際して優れた皮膚賦活効果等を発現するようにしたものである。

【0023】〈トウキ抽出の油性溶媒〉トウキの抽出は、炭化水素、油脂及びロウ類の一種若しくは二種以上からなる油性溶媒であって、皮膚親和性を有して皮膚に対して安全なものが使用される。なお、本発明で得られる皮膚賦活効果は、具体的には、皮膚(肌)の「ハリ」の改善、皮膚(肌)の「カサカサ」の改善、皮膚(肌)の「シワ」の減少(目立たなくなる)、皮膚(肌)の「シミ」の軽減若しくはニキビの減少等の現象として皮膚(肌)に発現するものである。本発明の「油性溶媒が二種以上からなる場合」としては、例えば、油性溶媒が炭化水素、油脂及びロウ類のいずれかより選択される二種以上である場合、二種以上の炭化水素、二種以上の油脂肪若しくは二種以上のロウ類からなる場合等がある。油性溶媒は、少なくとも90℃以上の高温領域で液状であるが、常温において液状となる物性を有することが望ましい。

【0024】炭化水素：炭化水素は、天然物若しくは合成物のいずれも使用可能であって、重合体(例えば、オリゴマー)であることも可能であって、化学構造の点からは、鎖式及び環式のいずれであってもよいが、鎖式炭化水素若しくは鎖式炭化水素主体のものが好ましい。また、鎖式炭化水素は、不飽和若しくは飽和のいずれの化学構造であってもよく、不飽和鎖式炭化水素にあっては、水素添加等の処理をしたものであってもよい。炭化

水素としては、例えば、スクワラン、スクワレン、 $\alpha$ -オレインオリゴマー(例えば、デセン2~4量体)、エチレン系共重合体オリゴマー(例えば、エチレン・ブロビレン共重合体オリゴマー)、低分子ボリエチレン、ボリプロピレン、合成スクワラン、流動パラフィン、パラフィン及びワセリン等が使用される。

【0025】油脂：油脂は、主成分が脂肪酸のグリセリントリエステルであれば、天然及び合成の植物系若しくは動物系が使用可能である。油脂としては、例えば、オリブ油、トウモロコシ油、綿実油、紅花油、米ぬか油、アボカド油、アーモンド油、ゴマ油、サフラン油、大豆油、ナタネ油、バーチック油、バーム油、ヒマシ油、ヤシ油、馬油、ミンク油、卵黄脂肪油及び豚脂等が使用される。

【0026】ロウ類：ロウ類は、主成分が高級脂肪酸と高級1価アルコールのエステルであれば、植物系及び動物系のいずれをも使用される。ロウ類としては、例えば、ホホバ油、液状オレンジラフィー油等が使用される。ただし、油性溶媒は、スクワラン、スクワラン含有植物油脂及びスクワラン含有動物油脂の一種若しくは二種以上からなる場合(特に、スクワランからなる場合)、本発明による効果を最大に享受可能となる。スクワランは、天然系スクワラン(イソブレンの6量体の水素添加物)及び合成系スクワラン(ブテン・イソブテン共重合体の水素添加物)のいずれも使用可能ではあるが、天然系スクワランによる場合に本発明の効果が大きくなる。スクワラン含有動物油脂としては、例えば、さめ肝油、タラ肝油が使用される。スクワラン含有植物油脂としては、例えば、オリブ油、トウモロコシ油、紅花油、綿実油が使用される。スクワラン含有の植物油脂では、オリブ油若しくはオリブ油主体のもののが好ましい。

【0027】〈抽出温度〉トウキ抽出物は、油性溶媒を用いて90℃以上の高温領域若しくは90℃以上の高温領域を含む温度領域でトウキを原料として抽出される。なお、トウキを90℃以上の高温領域を含む温度領域で抽出する場合とは、例えば、低温で抽出を開始してから途中で昇温して90℃以上の高温領域度で抽出を行うような場合である。抽出温度は、90℃以上の高温領域であれば良いが、好ましくは100℃以上の高温領域、特に好ましくは120℃以上の高温領域である場合には、トウキ抽出物由来の皮膚賦活効果が大きくなる(後記の実施例1及びその他の参照)。なお、抽出温度の上限は、他の条件(例えば、抽出時間)との関係によっても変化するが、約180~200℃程度の温度である。それ以上の高温ではトウキ抽出物の皮膚賦活効果に変動が生じるようになる。

【0028】〈抽出操作〉トウキの抽出は、90℃以上の高温領域に加熱した油性溶媒に原料トウキを混入して所定時間攪拌する等が代表的であるが、抽出操作につ

いては特に制約がない。原料トウキは、直接に加熱油性溶媒に混入してもよく、前処理（例えば、予め湯通しする、予め水に浸す等の処理）したものを加熱油性溶媒中に混入してもよい。ただし、原料トウキを直接に加熱油性溶媒に混入及び抽出して得られるトウキ抽出物の効果がより向上する。トウキ抽出物は、例えば、原料トウキが混ざった油性溶媒がろ過されてそのろ液（トウキ成分が溶解した油性溶媒）がオイルパック剤に配合される。原料トウキと油性溶媒との量的比率及び抽出に要する時間は、トウキ抽出物の効果との関係から設定される。油性溶媒と原料トウキとの量的比率は、例えば、1.0～1.5重量部（油性溶媒）/1重量部（乾燥原料トウキ）である場合（好ましくは2.0～1.2重量部（油性溶媒）/1重量部（乾燥原料トウキ）である場合）には、皮膚賦活効果を有するトウキ抽出物が容易に得られる。抽出時間は、短時間（例えば、約40秒～30分）であっても、本発明のために供し得るトウキ抽出物を得ることが可能である。

【0029】〈化粧料〉本発明の化粧料は、オイルパック剤及び化粧用油類として用いられるものである。なお、以下において、化粧料という場合は、オイルパック剤若しくは化粧用油類のいずれかに用いる化粧料の意味で使用している。化粧料は、皮膚に親和性のある主体的油性原材料と、皮膚賦活に有効な量のトウキ抽出物と必要な材料（成分）が配合されてなるものである。トウキ抽出物の有効配合量は、化粧料の油性原材料が油性溶媒として使用されそれにトウキ抽出物が含まれている場合には、例えば、油性溶媒が1～60重量%（化粧料の全体重量基準）程度の比率で配合される。トウキ抽出物の配合量は、化粧料の標準的な使用態様において皮膚賦活に有効な量である。化粧料に用いる油性原材料を油性溶媒としてトウキが抽出される場合には、例えば、トウキ抽出物を含む油性溶媒が1～60重量%（化粧料の全体重量基準）程度の比率で配合される。トウキ抽出物は、抽出後にろ過して得られる油性溶媒（すなわち、トウキ成分が溶解した油性溶媒）をオイルパック剤にそのまま配合してもよく、トウキ成分が溶解した油性溶媒を濃縮若しくは希釈してオイルパック剤に配合してもよい。また、油性溶媒からトウキ抽出物を分離して用いることも可能である。化粧料は、その油性原材料を油性溶媒としてトウキが抽出される場合には、トウキ抽出物を高効率に利用する化粧料を得られる。

【0030】トウキ抽出物は、化粧料の他の配合材料の種類に制約されることなく皮膚賦活効果を発現する。トウキの抽出、スクワラン、スクワラン含有植物油脂及びスクワラン含有動物油脂の一類若しくは二種以上からなる油性溶媒（特に、スクワラン）により行われて、トウキ抽出物が溶解した油性溶媒をオイルパック剤に配合する場合には、本発明による効果の享受が容易となる。

【0031】〈オイルパック剤〉化粧料がオイルパック

剤である場合、トウキ抽出物以外の配合材料（配合成分）については特に制約がない。オイルパック剤の量的に主体となる材料としては、例えば、油脂類、アルコール類、油性植物抽出物等がある。その他の材料としては、被膜形成剤（例えば、シリコン樹脂、ポリビニルアルコール、ブルラン等）、保湿剤（例えば、ムコ多糖類（例えば、ヒアルロン酸ナトリウム、コンドロチン硫酸ナトリウム）、コラーゲン、エラスチン、ペプチド等）、エモリエント剤（動植物油、炭化水素類）、酸化防止剤（例えば、ビタミンE、茶エキス等）、酸化防止剤の相乗剤（例えば、アスコルビン酸、アスコルビン酸の脂肪酸エチル）、老化防止剤及び美白剤等がある。

【0032】油脂は、油性溶媒になり得る油脂として前述した天然及び合成の植物系若しくは動物系が使用可能であって、例えば、前述例示のオリーブ油…豚脂等が使用可能である。アルコール類は、化粧品の原材料として有効なもの（特に、オイルパック剤の原材料として有効なもの）であれば使用可能であって、例えば、天然高級アルコール、合成高級アルコール及びステロール類が使用される。アルコール類としては、例えば、ベンジルアルコール、ラウリルアルコール、ミリスチルアルコール、オレインアルコール等がある。老化防止剤は、從来公知のもの（例えば、前述の老化防止剤）がトウキ抽出物と併用可能であって、美白剤その他についても同様である。そして、トウキ抽出物を含むオイルパック剤は、一回のオイルパックに使用されても、ハリ及びカサツキが目視で明確に判別可能に改善されて、シワも目視で明確に判別可能に減少する。しかも、複数回のオイルパックによってシミ及びニキビが目視で明確に判別可能に減少する。

【0033】〈化粧用油類〉化粧料は、トウキ抽出物を含む化粧用油類であることも可能である。化粧用油類は、油脂（油）、炭化水素若しくはロウ類等の油性材料が主原料若しくは主原料の一つとして含有すると共にトウキ抽出物を含有して、肌荒れ防止、うるおい付与及び保湿付与等を目的として皮膚に用いられる化粧料であって、代表的には、液状のものである。化粧用油類の油性材料は、本発明に用いる油性溶媒の具体例として挙げた、油脂、炭化水素若しくはロウ類等が用いられる。化粧用油類は、必要があれば、液状以外の形態（例えば、固体状）であることも可能である。化粧用油類を液状に調製するに際しては、透明液、乳液、クリーム若しくはゼリー状の広義の液状であることが可能である。

【0034】化粧用油類は、具体的には、油性材料と水系材料（代表的には、精製水）との組み合わせ、油性材料とアルコール系材料との組み合わせ若しくは油性材料と水系材料とアルコール系材料との組み合わせ等によって液状に調製される。化粧用油類は、所望の液状への調製に際しては、界面活性剤その他の材料を用いることが可能であって、陽イオン性、陰イオン性、両性若しくは

非イオン性の各種界面活性剤の使用が可能である。

【0035】なお、主原料としての油性材料とトウキ抽出物とを含有する乳液に調製されている場合は、特定の名称を前に付したローション等の名称（その具体的な使用目的からする名称）が付されている場合であっても、本発明の化粧用油類を別の名称で特定したにすぎないものである。トウキ抽出物を配合するに際しての条件（例えば、配合量、配合方法等）は、オイルパック剤の場合と同様である。また、化粧用油剤についても、必要に応じて、オイルパック剤に配合したと同様の材料を配合することが可能である。

【0036】〈オイルパック剤の使用〉本発明によるオイルパック剤は、その使用方法について特に制約がなく、オイルパックとして有効であれば、いずれのオイルパック方法でも可能である。例えば、水蒸気を皮膚（肌）にあてて皮膚（肌）を膨潤させて、オイルパック剤の適量を手指で顔全体に塗布して、さらに、水蒸気を皮膚（肌）にあてながら手指でオイルパック剤を皮膚（肌）によくなりませて、ホットタオル等でオイルパック剤を拭き取るというオイルパック方法である。

【0037】〈化粧用油類の使用〉化粧用油類は、具体的な化粧用油類についての従来の使用方法によつても、トウキ抽出物を配合による皮膚賦活効果が享受される。すなわち、トウキ抽出物を配合しても、化粧用油類の使用方法について特に制約を受けないことも本発明で享受される効果の一つである。

【0038】（第二の本発明）第二の本発明によるオイルパック剤若しくは化粧用油類として化粧料は、トウキ以外の油溶性植物の抽出物（以下において、油溶性植物をトウキ以外の油溶性植物の意味で使用し、油溶性植物抽出物をトウキ以外の油溶性植物の抽出物の意味で使用することがある）を配合して、トウキ抽出物由来の皮膚賦活効果を補完したものである。油溶性植物は、トウキの抽出と同じ油溶性植物（すなわち、炭化水素、油脂及びロウ類の一種若しくは二種以上からなる油溶性植物）を用いてトウキの抽出と同じ温度領域（すなわち、90℃以上の高温領域若しくは90℃以上の高温領域を含む温度領域）で抽出が行われて得られるものである。

【0039】油溶性植物としては、例えば、シコン、カミツレ、ゲンノショウコ、マンネンロウ、サルビア、ノバラ、シナノギ、セイヨウノコギリソウ、セージ、スギナ、トウキンセンカ、オタネニンジン、ビワ、ニンジン、ナツボダイジュ及びモモ等が用いられる。トウキ抽出物の効果を容易に補完し得る他の植物抽出物としては、例えば、シコン抽出物その他のが挙げられる。シコン抽出物については、従来提案のシコン抽出物によつては、オイルパック若しくは化粧用油類の使用に際してトウキ抽出物の皮膚賦活効果を補完するのが適切ではない、高溫で油溶性溶媒に溶解するシコン成分がトウキ抽出物の皮膚賦活効果を補完するのに適することが本発明で

見いだされている。

【0040】〈油溶性植物の抽出方法〉油性溶媒と油溶性植物とが、例えば、1～40重量部（油性溶媒）／1重量部（乾燥油溶性植物）になる量的比率になる場合には、トウキ抽出物の効果を補完する油溶性植物抽出物を得るのが容易になる。トウキ抽出物と油溶性植物抽出物とが、個別の油性溶媒により抽出して得られるものであつてもよく、同じ油性溶媒を用いて両抽出物が同じ油性溶媒に含まれるようにしておく。同じ油性溶媒にとり抽出する場合には、トウキと油溶性植物と同じ油性溶媒で順次に抽出してもよく、トウキと油溶性植物と同じ油性溶媒で同時に抽出してもよい。特に、オイルパック剤若しくは化粧用油類の油性原材料となる油性溶媒を用いてトウキと油溶性植物とが順次若しくは抽出する場合には、抽出後の油性溶媒を直接にオイルパック剤に配合可能であるので、両抽出物の効果を容易かつ有效地利用可能である。

【0041】なお、本発明においては、本発明の目的に沿うものであつて、本発明の効果を持て寄さない限りにおいては、本発明の改変若しくは部分的な付加変更は任意であつて、いずれも本発明の範囲である。本発明を実施例に基づいて具体的に説明するが、実施例は例示であつて本発明を拘束するものではない。

#### 【0042】

【実施例】〈実施例1〉原料トウキを120～160℃の高温領域のスクワラン（油性溶媒）に混入して軽く数分間攪拌後ろ過して固層を分離して液層（トウキ抽出物が含有のスクワラン）を得た。そのスクワランをオイルパック剤の油性原材料にして表1の配合組成の試験用オイルパック剤①を調製した。

#### 【0043】

#### 【表1】

ホホバ油	65 重量%
トウキ・ニキス抽出物	30 重量%
保湿剤、エモリエント剤	5 重量%
合計	100 重量%

そして、試験用オイルパック剤①を用いて官能試験を行つた。オイルパックは、水蒸気を顔にあてて顔の皮膚を膨潤させてから、試験用オイルパック剤①を約5～10ミリリットルを手指で顔全体に塗布して、その上から水蒸気を約10分間あてながら手指で試験用オイルパック剤①によくなりませた。それからホットタオルによって顔の皮膚から試験用オイルパック剤①を拭き取って、化粧水（ローション）によって顔の皮膚をクールダウンさせた。そして、20名のパネラがその方法によりオイルパックして鏡で目視により自己の顔の皮膚の状態を観察して評価した。20名のパネラは、20～30才の女性が7名で、30～50才の女性が13名であった。

【0044】評価は、シワ・小ジワ、ハリ・タルミ、ニキビ及びカサツキについての効果を対象として行った。シワ・小ジワに対する効果の評価は、A-1：目立だなくなった、B-1：やや改善された、C-1：変化が無い、D-1：少し増えた、E-1：増えたの5段階の評価基準で行った。ハリ・タルミに対する効果の評価は、A-2：非常に改善された、B-2：改善された、C-2：変化が無い、D-2：やや目立つようになった、E-2：目立つようになったの5段階の評価基準で行った。ニキビに対する効果の評価は、A-3：軽減した、B-3：少し目立だなくなった、C-3：変化が無い、\*

\* D-3：少し増えた、E-3：増えたの5段階の評価基準で行った。また、カサツキに対する効果の評価は、A-4：非常に改善された、B-4：改善された、C-4：変化が無い、D-4：やや目立つようになった、E-4：目立つようになったの5段階の評価基準で行った。表2及び表3は、シワ・小ジワ、ハリ・タルミ、ニキビ及びカサツキについての評価の結果を表したものである。

【0045】  
【表2】

B-3：少し目立だなくなった、C-3：変化が無い、\*

評価対象：シワ・小ジワ		評価対象：ハリ・タルミ	
評価基準	パネラ人數	評価基準	パネラ人數
A-1	3名	A-2	1名
B-1	16名	B-2	15名
C-1	1名	C-2	4名
D-1	0名	D-2	0名
E-1	0名	E-2	0名

【0046】

【表3】

評価対象：ニキビ		評価対象：カサツキ	
評価基準	パネラ人數	評価基準	パネラ人數
A-3	2名	A-4	1名
B-3	12名	B-4	15名
C-3	4名	C-4	4名
D-3	1名	D-4	0名
E-3	0名	E-4	0名

【0047】  
【実施例2】原料トウキを抽出温度を変えてスクワランにより抽出して得られたトウキ・スクワラン抽出物を実施例1の表1と同じ配合組成で試験用オイルパック剤2を調製した。試験用オイルパック剤2は、抽出温度が異なるトウキ・スクワラン抽出物毎に調製した。試験用オイルパック剤2は、実施例1と同様の方法によってシワ・小ジワ、ハリ・タルミ、ニキビ及びカサツキに関する効果を評価した。図1は、原料トウキの抽出

30

※出温度とトウキ抽出物由来の皮膚賦活効果との関係を示す概図である。図1の皮膚賦活効果は、シワ・小ジワ、ハリ・タルミ、ニキビ及びカサツキに関する効果を総合的に評価した。また、図1の基準レベルは、皮膚賦活効果が目視で明確に発現するレベルである。そして、図1によれば、低い温度領域で抽出されたトウキ抽出物は、オイルパック剤に配合しても、オイルパックに際しての皮膚賦活効果の発現が困難である。図1の斜線の領域は、皮膚賦活効果の評価のバラツキを示している。

【0048】  
【実施例3】原料トウキを120～160℃の高温領域のスクワラン（油性溶媒）に混入して軽く攪拌して数分経過後にろ過して固層と液層に分離して、その液層を再度加熱して120～160℃の高温領域にしてシコンを混入して軽く数分間攪拌してろ過により固層を分離して液層（トウキ抽出物及びシコン抽出物が含有のスクワラン）に分離した。そのスクワランをオイルパック剤の油性原材料にして表4の配合組成の試験用オイルパック剤3を調製した。

【0049】

【表4】

ホホバ油	65重量%
トウキ・シコンスクワラン抽出物	30重量%
保湿剤、エモリエント剤	5重量%
合計	100重量%

試験用オイルパック剤3を実施例1と同様の方法により評価した。表5及び表6は、その評価の結果を示している。

【0050】

【表5】

評価対象：シワ・小ジワ		評価対象：ハリ・タルミ	
評価基準	パネラ人數	評価基準	パネラ人數
A - 1	4名	A - 2	3名
B - 1	16名	B - 2	15名
C - 1	0名	C - 2	2名
D - 1	0名	D - 2	0名
E - 1	0名	E - 2	0名

## 【0051】

【表6】

評価対象：ニキビ		評価対象：カサツキ	
評価基準	パネラ人數	評価基準	パネラ人數
A - 3	3名	A - 4	8名
B - 3	15名	B - 4	18名
C - 3	0名	C - 4	0名
D - 3	1名	D - 4	0名
E - 3	1名	B - 4	0名

【0052】〈比較例1〉油性植物抽出物を含まない表7の配合組成の試験用オイルパック剤④を調製した。試験用オイルパック剤④を実施例1と同様の方法により評価した。

## 【0053】

【表7】

ホホバ油	65 重量%
スクワラン	30 重量%
保湿剤、エモリエント剤	5 重量%
合計	100 重量%

パネラは、シワ・小ジワ、ハリ・タルミ、ニキビ及びカサツキのいずれにおいても、実施例1及び実施例3の場合よりも目視で明確に判別できる程度に劣ると評価した。特に、ニキビ及びカサツキに対する効果が期待できないと評価した。

## 【0054】

【発明の効果】第一の本発明によるオイルパック剤及び化粧用油類によれば下記(1)～(4)に代表される様

的な効果が得られる。

(1) オイルパック剤及び化粧用油類の使用に際して、シワ・小ジワ、ハリ・タルミ、ニキビ及びカサツキに代表されるホメオシタシスの低下による皮膚賦活効果が目視で明確に判別できる程度に向上する。

(2) 従来のオイルパック剤及び化粧用油類が有していないニキビの治りが早くなる等の効果が得られる。

(3) 本発明のトウキ抽出物の効果は、従来のオイルパック剤及び化粧用油類の原材料に制約を受けていないので、オイルパック剤及び化粧用油類をして優れた皮膚賦活効果を有するものにすることができる。

(4) 従来のオイルパック剤及び化粧用油類についての従来の使用方法によつても容易に優れた皮膚賦活効果を得ることができる。また、第二の本発明によるオイルパック剤及び化粧用油類によれば下記(i)～(iv)に代表される様々な効果が得られる。

(i) オイルパック剤及び化粧用油類は、トウキ抽出物の皮膚賦活効果と他の油溶性植物の抽出物の効果と併有することができる。

30 (ii) トウキ抽出物の皮膚賦活効果を補完してより向上させることができになる。

(iii) トウキ抽出物の皮膚賦活効果を損なうことなく、他の油溶性植物の抽出物の新たな効果をオイルパック剤及び化粧用油類に付与することができる。

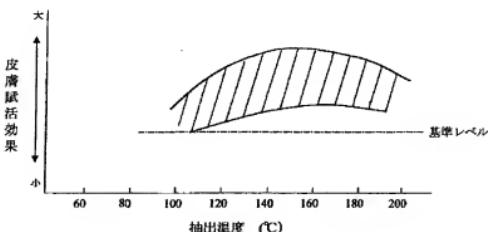
(iv) 従来未知であった他の油溶性植物の抽出物の効果が、オイルパック剤及び化粧用油類の使用において発現させることができる。

## 【図面の簡単な説明】

【図1】抽出温度とトウキ抽出物由來の皮膚賦活効果との関係を示す線図である。

—

【図1】



## 【手続補正書】

【提出日】平成12年3月2日(2000.3.2)

## 【手続補正1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0014

## 【補正方法】変更

## 【補正内容】

【0014】トウキ(当帰、和名・カラトウキ)抽出物(トウキエキス)についてみれば、水、エタノール、ブロビレンジリコール、1,3-ブチレンジリコール若しくはそれらの混合液により抽出したトウキ抽出物は、主成分として、クマリン誘導体、アンジェル酸、アミノ酸及び多糖類を含有して、保湿、抗アトピー性皮膚炎及び血流促進に有効であると示唆されている(「化粧品ハンドブック」日光ケミカルズ(株)ほか、平成8年発行、p347、須貝哲朗ほか:「皮膚」36(6)、849(1995)、長谷川義典ほか:「皮膚科紀要」88(4)、379(1993)等を参照)。トウキからn-ヘキサン可溶部及びn-ブタノール可溶部を除いて、水、エタノール若しくはこれらの混合液により抽出したトウキ抽出物も同様であると示唆されている。

## 【手続補正2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0027

## 【補正方法】変更

## 【補正内容】

【0027】〈抽出温度〉トウキ抽出物は、油性溶媒を用いて90℃以上の高温領域若しくは90℃以上の高温領域を含む温度領域でトウキを原料として抽出される。なお、トウキを90℃以上の高温領域を含む温度領域で抽出する場合とは、例えば、低温で抽出を開始してから

途中で昇温して90℃以上の高温領域で抽出を行いうる場合である。抽出温度は、90℃以上の高温領域であれば良いが、好ましくは100℃以上の高温領域、特に好ましくは120℃以上の高温領域である場合には、トウキ抽出物由来の皮膚賦活効果が大きくなる(後記の実施例1及びその他の参照)。なお、抽出温度の上限は、他の条件(例えば、抽出時間)との関係によっても変化するが、約180~200℃程度の温度である。それ以上の高温ではトウキ抽出物の皮膚賦活効果に変動が生じるようになる。

## 【手続補正3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0033

## 【補正方法】変更

## 【補正内容】

【0033】〈化粧用油類〉化粧料は、トウキ抽出物を含む化粧用油類であることも可能である。化粧用油類は、油脂(油)、炭化水素若しくはロウ類等の油性材料が主原料若しくは主原料の一つとして含有すると共にトウキ抽出物を含有して、肌荒れ防止、うるおい付与及び保湿付与等を目的として主として皮膚に用いられる化粧料であって、代表的には、液状のものである。化粧用油類の油性材料は、本発明に用いる油性溶媒の具体例として挙げた。油脂、炭化水素若しくはロウ類等が用いられる。化粧用油類は、必要があれば、液状以外の形態(例えば、固体状)であることも可能である。化粧用油類を液状に調製するに際しては、透明液、乳液、クリーム若しくはゼリーリー(ゲル状とも称される)の広義の液状であることが可能である。